

福島県 中学校長会 広報

- ・会長挨拶「被災校から学ぶ～着実な歩みを～」... 1
- ・学校教育の今日的課題
「新人事評価について考える」..... 2
- ・平成27年度県中学校長会の歩みと成果 ... 3
- ・専門部会活動の概要(行財政部会・研究部会・
進路指導部会・生徒指導部会・広報部会)
..... 4～6
- ・小・中学校合同理事会報告、中学校理事会報告... 6～7
- ・平成28年度県中学校長会主要行事予定 ... 7
- ・支会情報と特色ある経営(安達・田村・両沼・相馬) ... 8～11
- ・随想「散る花があって、咲く花がある」... 12



平成27年度を振り返って 被災校から学ぶ～着実な歩みを～

福島県中学校長会長 菅野善昌
(福島市立福島第一中学校)

本年度の重点テーマは「震災後5年目の本県中学校教育の復興・充実に向けた学校経営とその支援」そして、「新たな教育課題への対応」でした。

その方針を受け、行財政部会では、調査及び意見・要望活動を行いました。特に復興推進加配の継続やスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの配置拡充等に焦点を当ててきました。研究部会では、東北地区中青森大会・全日中福岡大会への参加、新研究主題に基づく各支会大会の開催と研究集録の刊行を進めました。進路指導部会では、進路指導の本質を踏まえながら、適正な進路指導充実のための諸調査の実施や副読本等の資料提供、高等学校との連携を図りました。生徒指導部会では、心のケア・いじめ・不登校・携帯情報端末の使用などについて調査し、対応を協議しました。広報部会では、様々な情報発信に努めました。さらに、本年度は、特別委員会を設置し、試行による新たな人事評価制度の実施に伴う諸課題の洗い出しと本制度の趣旨に沿った運用上の改善点、参考資料等についてまとめました。

いずれの事業におきましても、県事務局と各支会との連携・協力のもと、計画的に活動を進め、大きな成果を収めることができましたことに改めて感謝いたします。

また、特に県教育委員会との連携強化(高校教育課との連携も含む)につきましても、要望活動や懇談会の事前打ち合わせ等も含めて、現場の校長と教育行政に携わる者が、本県の生徒の豊かであってほしい成長に向けて、お互いに想いを語り合い、確認し合う貴重な役割を担っています。今後も、県教育委員会とのパイプをより太いものとしながら、校長会の活動の充実を図る必要があると改めて感じたところです。

今、県内は震災・原発事故からの復興を目指して、確かに日々一歩ずつ前へ進みつつあります。しかし、私は、昨夏に訪問した4校1園(2中学校と2小学校及び1幼稚園)が、避難先の同一の工場跡建物で教育活動を行っているT中学校の校長先生の次の話が、深く胸に焼き付いています。

外から見れば、適正な教育課程の基に、普通の教育活動が行われていると思われがちですが、満足な状況ではありません。この状況を普通と思ってほしくないということです。

理科室ない、技術室ない、家庭科室ない、美術室ない、体育館は今年の6月ようやくリース契約で新築されました。

また、生徒指導上のキーワードは「生徒の心に寄り添うこと」です。生徒は、みんな震災、原発事故によって、着の身着のままふるさとから避難してきたという恐怖の体験者であり、心に深い傷を負っています。生徒の心は極めて繊細で、折れやすいです。生徒に「大きな声」は絶対に出せません。震災後は、生徒たちに「自立」の精神を持たせるために頑張っています。先生方は、確かに定数よりも多く配置していただいておりますが、それでも十分な対応ができる状況ではありません。

この言葉は、的確な状況把握と強い教育愛に支えられた心の叫びであり、震災・原発事故を決して風化させてはならないという私たち校長への警鐘でもあると思います。震災・原発事故からの復興は息の長い取組みになります。まさに「学校は復興のシンボルであり、活力源である」ことを再認識し、しっかりと地に足を着けた堅実な歩みを進めていかなければなりません。

特に、本県の教育現場の状況を県や県議会、東北地区中や全日中に積極的に発信し、平成28年度から5か年の「復興・創生期間」における国の手厚い支援につなげていくことも求められます。

さらに、教育現場の責任者、教育の実践者、教職員のリーダーである校長こそが、理想とする教育観をしっかりと持ち、復興の牽引役としての頑張りを強く期待されています。

最後に、会員皆様のご尽力によりまして、この一年着実に歩を進めることができましたことを心より御礼申し上げますとともに、本年3月末をもちましてご退職されます校長先生方のこれまでのご功績に重ねて感謝申し上げます。

学校教育の今日的課題



— 新人事評価について 考える —

福島県中学校長会副会長 岡崎 強
(郡山市立郡山第五中学校)

教育再生実行会議や中央教育審議会などの提言を受け、文部科学省から矢継ぎ早に出される教育改革と学校現場が直面している今日的課題の中で、管理職としてリーダーシップを発揮し、生徒の学力向上を図り、心豊かなたくましい生徒の育成を図ることが常に求められています。

そのような中、地方公務員法の一部が改正され、能力及び実績に基づく人事管理の徹底が求められ、任用や給与、分限等に反映させる新人事評価の導入がよいよ来年度から本格実施されます。

これまで「勤務評定」や「目標管理制度」の実施により、教職員の資質や能力の向上、学校組織の強化を図るとともに、人事管理にも反映されてきました。しかし、今回の新人事評価がこれまでと大きく異なる点は、評価の開示と給与への反映です。

校長の評価が給与に反映された場合、教職員の評価への意識も当然穏やかではありません。開示により、管理職と教職員の信頼関係が損なわれるのではないかと、開示の時期と重なる三月は、中学校では生徒一人一人の進路実現や卒業式に向け学校が一つになって取り組まなければならない時に、嫌な雰囲気が漂い、足並みが揃わなくなるのではないかなど、この新人事評価には様々な懸念があります。こうした懸念や課題をどのようにして解決していけばよいのか、来年度の本格実施を前にさらに建設的な議論を交わしていく必要があります。

新人事評価システムが求めるもの

県の説明資料では、新人事評価システムの導入は教職員の評価だけではなく教育効果を高めるために、教職員の職務遂行能力や授業力向上につなげていかなければならないとあります。また、導入の効果として次の3点を挙げています。

- (1) 教職員の自己の能力開発
- (2) 教育活動の充実

(3) 組織の活性化

新人事評価に対して校長に求められるもの

過日、千葉大学の天笠 茂先生のご講話を拝聴する機会がありました。これまで、新人事評価システムは教育現場にはなじまず、学校現場に混乱を生じさせ、教職員との信頼関係が崩れ、より良い教育活動ができなくなるなど、否定的な見方をしていました。しかし、天笠先生のご講話を拝聴し、考え方が少し変わりました。日頃からの校長と教職員との関わりを通して、教職員を育て、やる気を出させ、「よい授業」「よい指導」「よい職務」へと導き、その実践を的確に評価することができる校長としての資質が問われるのだと思います。前記した3つの効果を高めるために校長としてしなければならない点を、次のようにとらえました。

学校の教育目標に基づき、校長としての学校経営ビジョンを明確に提示し、全教職員で共通理解を図り、個人の目標設定に生かせるようにする。

校長は、教職員一人一人の能力や適性を把握するために、面談や授業参観などを的確に行い、日頃から教職員との信頼関係を築く。校長は、教職員一人一人のよさを認め、励まし、個人の目標が達成できるよう、個に応じた適切な指導助言を日頃から行う。教職員一人一人の将来を考えた公正、公平な評価が行われるよう日頃から努める。

この校長の評価なら、どんな評価であろうが、今後の自分の教員としての資質向上のために受け入れようと思ってもらえるような校長を目指さなければなりません。「権威は受容されることにより権威になる」天笠先生のこの言葉が新人事評価に何か示唆を与えるものを感じました。

平成27年度

県中学校長会の歩みと成果



事務局長 福地 憲司
(福島市立福島第四中学校)

東日本大震災及び原発事故からまる5年が経過しようとしています。しかし、未だ再開が叶わない臨時休業や避難先に移転しての再開などの学校は合わせて13

校。

臨時休業中の学校においては、それぞれの避難先における生徒の心のケアなどの支援策を講じ、再開に向けての最大の課題となっている生徒の確保等の条件整備に当たっているところですが、教育の復興に向けた道のりはまだまだ遠く、依然厳しい環境であると言わざるを得ません。

このような中、平成27年度の「ふたば未来学園高校」の開校は、今後の本県の教育の復興に向けた「発信」、さらに「人材育成」の期待を担った、大きな第一歩でありました。

さて、本県の中学校教育の当面する課題としては、学校再開、心身の健康、放射線教育、防災教育等の推進や、人事評価の導入等の新たな教育制度改革への対応など多岐に渡っています。そのような中、本校長会の運営については、様々な状況下にある各学校の実態を踏まえ、「教育活動の正常化と当面する諸課題の解決」という基本方針の基に、「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源である」という共通認識のもと、各専門部会を中心に充実した活動を展開することができました。今後も、校長は学校経営の最高責任者としてのリーダーシップを発揮し、自校の教育課程の効果的な運用と教育環境の整備を図りながら、子供達に「生き抜く力」を身に付けさせなければなりません。

各専門部会におきましては、県専門部会長・専門部幹事、各支会専門部会長の皆様を中心とした各会員の皆様のご尽力により、大変充実した活動となり、大きな成果を収めることができました。

専門部会の活動概要

(1) 行財政部会

前年度に引き続き「大震災・原発事故の影響に係る調査」を含む当面する重要課題についての調査研究を行い、集計・分析の結果を基にして県人事委員会、県議会各派及び各市町村長と市町村教育長への要望活動を実施しました。

また、小・中学校長会合同の県教育庁関係者との懇談会を開催し、学力の向上、体力の向上、

心のケアと教育相談体制の充実、避難区域の学校経営の取り組みなどの課題について活発な意見交換を行い、教育行政施策の一層の充実を依頼しました。

(2) 研究部会

平成27年度からの全日中の新研究主題に基づき、第1年次の研究を各支会・学校の実態に即して推進し、研究集録を刊行しました。

また、全日中福岡大会、及び東北地区中青森大会における、第4小主題「健康・安全教育」分科会において郡山支会が研究の成果を発表しました。さらに、福岡大会全体協議会「地区提案」では、飯館中学校の「感謝と感動、そして前進。災害を乗り越え、たくましく生きる生徒の育成～今だから、飯館中だからこそできること～」の発表があり、中学校現場の現状と課題、そして実践について広く発信しました。

(3) 進路指導部会

進路指導に関して「高等学校入学者選抜方法の改善要望に関する調査」「進路指導の現状と問題点」「卒業生の進路状況」の各調査を行い、「進路指導に関する調査集計結果」として各学校へ情報提供しました。また、県入試事務調整会議や県立高等学校長協会に対して、より望ましい選抜方法や事務手続き等について提案しました。さらに、前年度に引き続き、県内全てを対象とする「進路動向調査」を実施し、全国的な進路希望状況の把握をしました。

(4) 生徒指導部会

いじめや不登校等の問題の解決に向けた「スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の活用効果を把握する調査」及び昨今問題の「インターネット利用に関する調査」を実施し、分析・考察の結果を各学校に情報提供することによって生徒指導の充実を図りました。

また、「いじめ防止対策推進法」に基づき、各校長のリーダーシップのもとに校内体制の再構築などいじめの未然防止や改善・解決に向けた取り組みを展開しました。

(5) 広報部会

中学校長会ホームページの管理・運営とともに、広報誌を年2回発行し、ホームページへの掲載等も通しながら、本会の組織・運営、事業内容、活動状況等について、広く情報を発信しました。

専門部会活動の概要

● 行財政部会 ●

県小中学校長会の活動方針を踏まえ、激しい変化にも対応しつつ、教育行財政上の課題解決に向けて組織的な対策活動に取り組んだ。

調査内容については、吟味した上で加除修正・整理統合し全体的な見直しをした。特別調査は、震災後4年以上経過したものの、復興への道のりが未だ深刻な状況であることから、継続実施した。

1 活動の重点

当面する重要課題の調査研究と課題解決
教育諸条件の整備・充実
教職員の待遇改善

2 調査研究活動

- (1) 調査 : 教職員配置等に関する調査
- (2) 調査 : 教育施策の実施状況調査
- (3) 特別調査: 大震災・原発事故の影響に係る調査
- (4) 教職員人事の反省: 平成27年度人事

3 要望活動

小中の佐久間会長、菅野会長を中心とする要望団を結成し、9月に要望活動を行った。その際、加配教員の増員やSC及びSSWの拡大配置の必要性等、活動の重点、調査結果のまとめをもとに要望活動を行った。(要望書参照)

- (1) 面談(要望内容説明)
福島県人事委員会
県議会議員政党等
- (2) 要望書届け
福島県市長会、町村長会
福島県町村議会議長会、市議会議長会
市町村教育委員会、都市教育長会、町村教育長会の代表機関等
- (3) 主な要望事項
教職員の加配について
SC及びSSWの拡大配置について
学級編制基準や教職員定数改善について
人材確保のための処遇改善について 等

4 教育懇談等

関係機関と懇談を行い、現状説明等を行った。

- (1) 福島県公立学校退職校長会(7月)
- (2) 福島県教育庁関係者(8月)

(行財政部会長 茅原 秀雄)

● 研究部会 ●

1 共通理解に基づく共同研究の推進

新しい研究主題「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」を指標とした8小主題についての研究が今年度よりスタートしました。支会ごと特色ある研究実践を推進し、通常の県研究協議会としては、9年ぶりとなる次年度開催予定の県研究協議会いわき大会を見据えながら、3年計画の継続研究を推進することができました。

2 「研究集録」の刊行

前述のように、今年度は新主題に変わっての研究の初年度ではありますが、8つの小主題における各担当支会の1年間の研究の取組をまとめた「研究集録」を刊行し、その成果を全会員で共有するとともに、2年次以降の研究推進につなげることができました。

3 全日中、東北地区中と連携した研究の深化

6月開催の東北地区中青森大会(第1分科会)及び、10月開催の全日中福岡大会(第4分科会)で、郡山支会が第4小主題「健康・安全教育」にかかる研究内容及び成果を発表しました。

また、東北地区中青森大会、全日中福岡大会には本県からも多くの会員が参加し、各分科会における研究協議を通し、他県の研究推進等の情報を収集することができました。

4 原発事故に関わり、学校教育が向き合った課題、対応等の記録の累積と発信

- (1) 研究集録の中に、「ふくしまの今」を編集し、特に“双葉支会”を中心とした福島の現状について記録を累積するとともに、学校課題等を全会員で共有しました。
- (2) 全日中福岡大会において、「震災体験が切り開いていく教育」の一端として、飯館村立飯館中学校の実践例を紹介、全国に発信することができました。

(研究部会長 小針 伸一)

● 進路指導部会 ●

本部会では、「1 「生きる力」をはぐくむ進路指導の積極的な推進」、「2 高等学校入学者選抜方法の改善に向けた高等学校や関係機関との連携」、「3 適正な進路指導充実のための諸調査の実施と資料提供」の方針のもと活動してきた。

本年度も、昨年度に引き続き、県立高等学校長協会（高校入試検討委員会）、私立高等学校協会との連携を深めながら、調査書の記載内容の統一についての周知と実践の徹底を図った。

1 「生きる力」を育む進路指導の積極的な推進

各支会においては、進路指導に関する情報交換や情報提供を積極的に行うとともに、部会長会においても、情報交換・協議を通して進路指導体制や指導内容の改善・充実の方向性を探った。

2 高等学校入学者選抜方法改善への対応と連携

進路に関する調査の集計結果をもとに、県立高等学校入学者選抜事務調整会議においても、望ましい選抜方法や事務手続き等の、改善事項について具体的な提言を行った。

特に、昨年度から実施された、合格者一覧の電子メールによる交付についての改善意見が多く取り上げられた。

また、メール交付申請届の郵送による提出や3月末の高校オリエンテーション参加者名簿のメールでの提出などが協議の結果、可能となった。

3 「中学生活と進路」＜福島県版＞の編集

副読本「中学生活と進路」の部分改訂にあたり、全国版と県版の内容の整合性を図るとともに、生徒の実態や生徒を取り巻く情報環境の変化に応じた内容になるよう検討を加えた。また、写真やイラスト、図版、統計資料等を最新のものとするなど、学習活動に役立つ資料に差し替えを行った。

通信制の諸学校の、取り上げ方については、慎重な審議を継続することとした。

4 県下一円の進路希望調査の実施

進路希望調査を全県下一斉に実施する取り組みを年間2回実施した。全県下一円で数値を各校の進路指導に生かすことができたので、次年度も数回実施していくこととした。

(進路指導部会長 大橋 誠寿)

● 生徒指導部会 ●

本部会では、規範意識を高める指導、震災・原発事故等にかかわる生徒指導上の課題への的確な対応、小学校との連携、生徒手帳の刊行の4つの活動方針を立て、活動を推進してきました。

これまでの生徒指導上の諸問題に関する調査に改良を加えて調査を行い、各学校の取組みに生かすことができるよう資料の提供を行いました。

主な活動の概要は、以下のとおりです。

1 高い規範意識と望ましい人間関係を基盤とした学習集団づくり

今年度は被災5年目に当たり、引き続き配慮を要する生徒が急増するのではないかと懸念され、各学校において心のケアに努めた結果、成果が見られました。今後とも、心のケアについて一層配慮した対応を行っていく必要があります。

2 震災・原発事故等にかかわる課題、不登校やいじめ、反社会的問題行動等当面する諸課題の解決や未然防止

これまで実施してきた調査では、教育相談体制について人員配置や勤務時間等の増加を教育委員会へ一層働きかける必要があることが確認されました。また、反社会的行動は減少したものの、不登校の発生には歯止めがかけられませんでした。

今年度は生徒のネット端末利用状況を知るため、小学校と同じ質問項目で実態調査を加えました。その調査からは、小中学校で共通実践の必要性を示すデータを提供することができました。今後、調査項目等の精査や小学校やPTAと連携したネット端末利用改善の提言と実践が必要となります。

3 小学校等との連携

中学校区内の小学校、地域等との連携がさらに進められ、発達段階に即した一貫性のある基本的生活習慣づくりに効果をあげているところが増えています。また、広域的な補導等において、高等学校と連携を図るなど新たな連携体制が進みました。

4 生徒手帳の編集、刊行

予定通りに生徒手帳を編集し、刊行することができました。

(生徒指導部会長 齋藤 良一)

● 広報部会 ●

第65回総会での決議に従い、7月と3月に広報誌「福島県中学校長会広報」を発行し、本会や支会の活動紹介及び、関係団体等の活動概要の報告を行った。広報誌については、平成25年度よりホームページ上での掲載となり本年度に至る。

また、ホームページの更新・維持・管理を行い、各部会等にも次第に活用されてきている。

【会報の主な編集内容】

1 第154号（7月1日発行）

会長あいさつ（菅野善昌会長）

平成27年度県中学校長会総会の概要及び組織
学校教育の今日的課題

「教師に求められる資質・能力とは」

（深谷哲三副会長）

県中学校長会の活動と運営

（福地憲司事務局長）

各専門部会活動の概要（各専門部会長）

全日本中学校長会総会報告

支会情報と特色ある経営

伊達・郡山・東西しらかわ・北会津

新会員紹介・新会員の声

随想「夢は力なり」（島 義一副会長）

2 第155号（3月1日発行）

平成27年度を振り返って（菅野善昌会長）

学校教育の今日的課題

「新人事評価について考える」

（岡崎 強副会長）

県中学校長会の歩みと成果

（福地憲司事務局長）

各専門部会活動の概要（各専門部会長）

県小・中合同理事会報告、県中学校理事会報告

平成28年度主要行事予定 [県、東北・全日中]

平成28年度東北地区中研究協議会の概要

支会情報と特色ある経営

安達・田村・両沼・相馬

随想「散る花があって、咲く花がある」

（小山金也副会長）

（広報部会長 林 尚）

● 小・中学校合同理事会報告 ●

本年度最後の小・中学校合同理事会が2月19日（金）、グリーンパレスで開催されました。平成27年度を総括する報告、28年度に向けての計画が審議されましたので、概要を報告いたします。

佐久間裕晴小学校長会長より、震災5年目、小中学校が連携し、学力の向上や肥満傾向の改善に各校が尽力してきたことへ対して感謝とねぎらいの言葉がありました。また、県内にはまだ臨時休校や再開の見通しが立たない学校があり、未だに苦労している現状を全会員が受け止める必要があることを確認されました。また、国の動向ということで、教職員の基礎定数の改善を図る要望、震災復興加配を維持するための成果をあげること、新学習指導要領（2020年）の来年度告示の可能性、次年度のふくしまっ子の予算確保等についてお話がありました。

【報告】

- 1 平成27年度退職役員感謝状贈呈式について
- 2 教育関係団体との懇談会について
- 3 小学校長会・中学校長会の合意事項について

【協議】

- 1 平成28年度県小・中学校長会合同開会式及び理事会、総会の運営について

期日：平成28年4月20日（水）

会場：福島県教育会館

- 2 平成28年度主要行事について
次年度の校長会行事予定案について事務局提案のとおり了承された。

- 3 平成27年度教職員人事の反省について

各小・中学校長は、3月25日までに各支会行財政部（会）長に提出する。

各支会小学校行財政部長は、4月18日までに各支会中学校行財政部会長に提出し、小・中合議の上、5月6日まで、A4中質紙で140部印刷の上、県中学校長会事務局に提出する。

- 4 平成28年度行財政部（会）の調査について

平成28年度も震災後の様々な環境下におかれる県内の現状を鑑み、継続して特別調査を実施する。調査は、28年度は実施しない。

退職役員は、佐久間、菅野両会長を含め小学校31名、中学校14名です。多大の功績をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

● 中学校理事会報告 ●

本年度を締めくくる第5回中学校理事会は、去る2月19日に開催されました。初めに菅野善昌会長より、震災5年目の福島県の復興に向けた各専門部会の取り組みや課題解決に向けた御苦労に感謝とねぎらいのことがありました。要望活動によるSSWの拡充、新しい人事評価制度へ向けての特別委員会の設置、特に県教委との連携の強化や高校教育課との連携は大きな成果を上げることができたことに重ねて感謝のことがありました。

平成29年度の70周年記念誌発行に向け、復興・創生期間として福島の現状を積極的に発信すること、水俣市との交流会の継続、東北地区中宮城大会の参加やいわき大会の充実した開催等、校長会として取り組まなければならない新たな課題も多くあります。今年度末で役員を退職しますが、事務引継ぎをしっかりと、後輩に託したいとのことでした。

その後、下記について報告・協議がなされました。

【報告】

- 1 全日中理事会報告
- 2 教育関係団体との懇談会について
- 3 県中学校長会共催、後援承認行事(事業)について

【協議】

- 1 平成27年度会務・事業報告について
- 2 平成27年度会計執行状況について
- 3 平成27年度関係団体との連携について
- 4 平成28年度事業計画(案)について
- 5 平成28年度中学校長会行事予定(案)について
- 6 平成28年度会計予算(案)について
- 7 平成28年度第1回理事会の運営について
- 8 平成28年度第66回総会の運営について
上記の件について、事務局提案の通り了承されました。

【連絡】

- 1 平成28年度全日中宮城大会(兼東北地区中宮城大会)への参加割り当てについて
- 2 平成27年度古岡奨学生の内定について
- 3 平成28年度当初の関係書類提出について
- 4 平成28年度の会費納入について
次年度は小学校が小・中学校長会の運営当番になります。

平成28年度県中学校長会主要行事予定

[県、東北地区中、全日中関係]

月	日	県 関 係	東北地区中・全日中関係
4	12 20	合同事務局会 第66回総会・理事会	
5	12 19 23 25 26	行財政部合同部会長会 研究部会長会 合同事務局会	全日中理事会 全日中総会(～27)
6	3 6 7 16 17	合同理事会 進路指導部会長会 生徒指導部会長会	東北地区中副会長会 東北地区中理事会
7	13	行財政部合同代表部会長会 ・広報第156号発行	
8	1 18	合同事務局会 合同理事会	
9		要望活動	
10	14 19 19 20 27	県研究協議会いわき大会 進路指導部会長会	全日中理事会 東北地区中臨時副会長会 全日中宮城大会(～21)
11	7 15 17	研究部会長会 合同事務局会 生徒指導合同部会長会	
12	1	合同理事会	
1	18 20 24 25	研究部代表部会長会 進路指導代表部会長会 生徒指導代表部会長会	全日中理事会
2	1 2 3 22 23	行財政部合同部会長会 合同事務局会 合同理事会(～23)	東北地区中副会長会・理事会・事務局会(仙台市) 全日中事務担当者会(～24)
3	15	・広報第157号発行 会計監査	

● 平成28年度東北地区中研究協議会の概要 ●

= 全日中宮城大会を兼ねる =

- 1 大会主題
『社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育』
- 2 期 日
平成28年10月20日(木)・21日(金)
第1日目:「開会式」「文科省説明」「全体協議会」「分科会」
第2日目:「全体会」「記念講演」「閉会式」
- 3 会 場
仙台サンプラザホール他
- 4 記念講演
講師:中村 雅俊 氏(俳優 歌手)

支会情報と特色ある経営

安達

安達支会の活動



安達支会長 青田 誠
(本宮市立本宮第一中学校)

安達支会は、2市1村の11校の会員で構成されています。今年度は4名の新会員を迎え、「安達は一つ」の合言葉の下、各学校の特色を生かしながら、より一層の教育活動の充実を図るため連携を重視した取組を行ってきました。

本支会は「教育に関する研究及び協議を行い、その改善向上を図るとともに、地域教育の発展に寄与すること」を目的に、例年下記のような事業を推進しています。

一部のみ掲載

学校経営に関する研究及び協議

教育上必要な調査研究

会員相互の職能向上を図るための事業

その他必要な事業等

本年度も、地教委の助言等を踏まえ、知徳体のバランスを図りながら各校の教育課題解決と充実を目指して諸活動に臨みました。

1 校長会の開催について

年間7回の校長会を実施してきました。その時々为学校経営上の課題解決や情報交換、県校長会の部会の確認等を行い、支部全体で充実した学校経営を目指してきました。

2 研修会の実施について

研究部を中心に時代の要請に応えるために「防災教育の推進」をテーマに据え3年計画の研究をスタートさせました。また、教職員の資質向上の一助となるよう市村教育委員会の支援を受け、教頭、中堅教員、講師に対する実務研修会を実施してきました。

3 その他の活動

昨年末には退職校長会との協議会を実施しました。現職からは教育制度や現状等について説明し、意見交換等を行いました。充実した協議会となり、その後に行われた教育懇談会では、会員相互の親睦にも繋がり、今後の安達地区の教育について理解を深めました。

《学校紹介》

夢をもって一步前進する 学校を目指して

本宮市立本宮第一中学校

本校は、生徒一人一人のもつよさや可能性を引き出し、夢や希望をもって学校生活を送ることができると目指してきました。さらに地域からより信頼される学校を創出したいという思いで様々な教育活動に取り組んできました。

特に、新たな学校に生まれ変わるべく、昨年度から来年度の7月にかけて校舎全体の耐震補強改修工事が行われております。この間、生徒、保護者、教職員が共に汗を流しながら完成を楽しみに数度にわたる引越しを行ってきました。

ところで、本校では長い伝統を受け継いできた研学祭(文化祭)があります。市の秋祭りとタイアップし、目抜き通りを数キロに渡って学年毎に生徒自身が作成した10台あまりの「山車」を担いで練り歩くという行事も含まれています。放課後、生徒たちは色々なキャラクターをモチーフに、悪戦苦闘しながら慣れない製作に取り組んでいきます。研学祭では、クラス毎の合唱や総合で調べた地域学習などの発表も実施されるため、学校としては大変にエネルギーの必要な行事です。しかし、大きく重い山車を担いで市内を歩くと、多くの市民が歓声で出迎えていただくため、生徒にとっては中学校時代の大きな思い出になる行事でもあります。



山車を担いで歩く生徒たち

(校長 青田 誠)

田村

田村支会の活動について



田村支会長 宗像 静夫
(田村市立船引中学校)

田村支会は、田村市・小野町・三春町の1市2町内にある中学校10校で組織され、地域の学校として、市・町当局や教育委員会との円滑なる連携のもと、地域の特色を色濃く取り入れた学校経営がなされています。

また、東日本大震災から5年が経過しようとしている今、避難先の地域の学校に通学する生徒たちは、そこで良好な関係を築き、親密なる所属感をもって、共に諸活動に参加しています。状況を受け入れ、課題を乗り越え、共に協力し、励まし合って活動する姿には、将来の地域人としてのたくましさすら感じます。

本支会は、4月の総会からその活動を開始しました。新任校長1名を迎え、他9名の校長の顔ぶれは昨年度同様という状況故に、より関係性・連携の密な状況でのスタートとなりました。行財政部・研究部・進路指導部・生徒指導部を設け、中学校教育を多様かつ多角的な視点から見つめつつ、様々な教育諸団体にも所属し、一人何役もこなすという、少人数の組織であるが故の苦労も抱えています。

夏の校長会においては、小学校長会と合同で今年度試行年度として取り組んでいる新人事評価制度についての研修を実施しました。仙台市の仙台南高校の渋谷・山本両先生を講師にお迎えし、先行実施されている新人事評価制度に関する研修に取り組みました。宮城県と仙台市の事例をもとに実施の背景や具体的な進め方について豊富な資料をもとに説明をしていただき、非常に有意義な研修の機会となりました。

今後も、各中学校間の情報交換・連携をさらに進め、本支会内に暮らす生徒の健全育成や教育環境の整備に努めるなど、よりよい学びの環境づくりのための学校経営に取り組んでまいります。

《学校紹介》

夢の実現のために手と手をたずさえて

田村市立都路中学校

震災の影響により、3年間旧田村市立春山小学校に移転していました。平成26年度から都路の校舎で学校が再開し、学校再開後のビジョンを1年目「慣れる」、2年目「親しむ」、3年目「創る」とし、都路こども園、古道小、岩井沢小、都路中が一体となり、「幼・小・中連携推進事業」として、次のプロジェクトを実践しております。

- 1 「幼・小・中教員交流による質的改善」
- 2 「園児児童生徒の交流による教育活動の充実」
- 3 「特色ある教育活動の推進」

ポイントは「交流」と「都路の特色を生かした教育」です。今年度、算数・数学コアティーチャーを活用し、小中学校でTTの授業を継続的にを行い、幼小中の教員が集まり授業研究会を3回実施しました。成果として、児童生徒の関心・意欲が高まり、中2数学の福島県学力調査では、偏差値が昨年度より3.6ポイント向上しました。



地域の方々を招いての都路地区音楽祭を開催するなど、園児児童生徒と一緒に活動し、互いのよさを認め合いました。また、家庭にリーフレットを配布し、家庭学習の習慣化や夜9時以降は携帯・スマホを使わない運動(ナイ・ない運動)などを啓発しました。地域学校保健委員会では、肥満や虫歯予防について考えました。昨年度4名いた不登校生徒は1名に減少し、学習習慣、生活習慣育成事業アンケート結果をみると自己肯定感も向上しています。

まだ約1/3の生徒が仮設住宅などから通学している現状ですが、素直で明るい子供たちです。夢の実現のために、都路のこども園と各学校、そして、地域が連携し、学力向上と学習習慣・生活習慣の確立のために実践を進めていきます。

(校長 富岡 信)

両 沼

両沼支会の取り組み



両沼支会長 瓜生 幸男
(会津坂下町立坂下中学校)

両沼支会は今春、3名の転入会員と1名の新会員を迎え、新しい体制でスタートしました。会員数が10名と少ない体制ではありますが、

一人ひとりの良さを発揮し、協力・工夫しながら活気のある活動を展開しています。

少ない会員数の良さを生かし、年5回開催の定例校長会の他、中体連や中教研の諸会議で様々な情報交換や意見交換を行っております。それぞれの組織における会員一人ひとりの役割や責任の大きさもあり、定例の校長会では、様々な考え方や意見が交換され、活気があり、有意義な研修の場にもなっています。

今年度は、東北・全国校長会の参加のあり方、中体連の諸会議や各種大会のあり方、年々減少する支部中教研会員数の問題に対する対応など、「生徒一人ひとりの健やかな成長」に軸足を置いた改革・改善がされました。これまでの慣習にとらわれず、思い切った改革ができる素晴らしい両沼校長会の一員であることを大変嬉しく思いました。

本支会では、退職校長会との緊密な連携が行われております。校長会会報に退職されたすべての校長先生方の寄稿があり、多くの示唆をいただいています。夏休みには、退職校長会と現職校長会との合同研修会と懇親会があります。今年度は「新しい人事評価のあり方」について、活発な意見交換があり、大変有意義な合同研修会になりました。

また、合同懇親会では、退職された校長先生方から、人生のあり方など、多くのアドバイスをいただくことができました。

両沼支会各学校の町村においては、過疎化・少子化の影響で生徒数・学級数の減少に歯止めがかからず、教育行政上の大きな課題となっています。

両沼中学校長会は、今後も、関係団体との連携を密にし、活発な意見交換と活動を通して、信頼される学校づくりのために努力したいと思います。

《学校紹介》

学校発地域活性化の試み

柳津町立西山中学校

「地域の観音堂にぶら下がっている三角形のものはなんですか？」

来校者が何気なくつぶやいたひとことをきっかけとして生徒たちが開発した、西山独自のみやげ物「『ひし』ストラップ」。地域のお年寄りの方々から製作協力をいただき、コラボレーションが始まった。現在では、「民芸品」として定着、町内の随所で販売されている。

消えつつあった地域の風習を掘り起こし、新たな民芸品を開発するに至った生徒たち…。地域に見守られる存在であった中学生が、地域に提言し、地域をも動かす存在となって活動している。

西山中学校は全校生16名。柳津町東部の山間地域に位置し、地域は近年少子高齢化が著しく進行している。本校では、取り組むべき課題として、この「過疎・高齢化」という大きな問題に目を向け、「アントレプレナーシップの育成」という切り口でその課題に答えようとしている。

「過疎の要因は若者が町から出て行くこと」「若者が町から出て行くのは仕事がないから…」「仕事がなかったらつくればいい」「では、この地で起業するには…。」

この課題に対し、生徒たちは、発信するに足る地域の特色や魅力を積極的に掘り起こし、その上で、「魅力発掘旅行パンフレットづくり」「温泉たまごを活用した創作料理のメニュー化プロジェクト」「みやげ物の開発プロジェクト」「紅葉の小径プロジェクト」など、多くの実践に取り組んでいる。

冒頭の「ひしストラップ」は、製品のやりとりを通して、お年寄りには孤立化防止、生徒には貴重な異年齢交流の場、ボランティア活動の場ともなっている。徳島県の「葉っぱプロジェクト」のように、西山中学校発のプロジェクトが地域活性化につながることを夢見ている。

(校長 高橋 弘悦)



相馬

相馬支会の活動



相馬支会長 島 義一
(相馬市立中村第一中学校)

相馬支会は今春、2名が退職、3名の転入会員をお迎えし、4月の総会を経て、新役員、事業計画、予算案等が承認され、会員の心を一つにして平成27年度がスタートしました。相馬支会は、新地町、相馬市、南相馬市、飯館村の13校で組織されていますが、沿岸部の学校での津波の被害や福島第一原発事故により今尚避難を余儀なくされ、仮設校舎で教育活動を行っている学校もあります。また、未だ多くの生徒が県内外に避難しています。温かく避難生徒を受け入れていただいておりますことに、紙面をお借りしまして御礼申し上げます。

相馬支会の活動は、年4回の中学校部会と研修会並びに相双中高校長連絡協議会を通して、きめ細かな情報交換や協議を行い、共通理解を図りながら相馬地方が抱えている諸問題の解決に向けた取り組みを行っています。その主な内容は次の通りです。

- 1 震災5年目を迎えるに当たり危惧される問題行動や心のケアのあり方、SCやSSW等の専門機関との連携について。
- 2 今年度施行される新しい人事評価についての取り組み状況や課題について。
- 3 相双地区の新設校や学科改変に伴う諸問題、並びに中高校長連絡協議会のあり方について。

また、今年度の全日中研究協議会福岡大会の全体協議会において飯館中学校の和田節子校長が発表した「感謝と感動、そして前進。災害を乗り越え、たくましく生きる生徒の育成」の地区提言の作成に協力するなど、会員一丸となって活動しております。



磯部幼・小・中合同避難訓練（磯部中学校）

《学校紹介》

学び・生活・地域を「つなぐ教育」

相馬市立磯部中学校

磯部地区は住んでいる方々のつながりの強い地区で、地域が一体化した行事が昔から行われてきました。磯部幼・小・中大運動会、磯部地区盆踊りは伝統行事として毎年楽しみにされています。しかし、5年前の東日本大震災、特に巨大津波により集落のみ込まれて多くの犠牲者をだしました。さらに、高台や他地区への移転などで地域コミュニティは崩れ、児童生徒数も激減しました。

今年度は、県教委の「つなぐ教育」推進事業の指定を受けたのを機に、これらのつながりを一層強固なものとしつつ、さらに「学び・生活」をつないで、子どもたちの学力向上、将来の夢の実現につなげていこうと取り組んでまいりました。

地区の代表の方々を招いて推進委員会を開き、「未来へつなぐ磯部っ子」のテーマのもと、事業の概要を説明し協力を依頼しました。学習・生活面では、小・中共通の「学びの手引き」、生活の決まり「磯部っ子 十の約束」としてまとめ、小・中学校が様々な場面で関連づけて指導を行いました。また、地域連携では、地域の方々に協力を得て、幼・小・中合同避難訓練・炊き出し訓練や地域をつなぐ教育講演会、福島県音楽隊を招いての安全コンサートを開催するなど、地域と子どもたちの交流を深める活動を行いました。

児童と生徒のつながりがやがて地域のつながりを強め、磯部地区が活性化して学校教育活動にも反映される。このような良い環境をつくり出す第一歩として、これからも磯部幼・小・中学校が一体となって取り組んでいきたいと考えています。



炊き出し訓練

(校長 早川 良一)

星野富弘氏をご存知のことと思う。1970年中学校保健体育科教員として出身の群馬県に採用された2ヶ月後、クラブ活動の指導中に頸随を損傷し首から下の機能を失われた。おそらく、生きる希望も無くし地獄の苦しみを経験されたことと思う。やがて、絵筆を口にくわえて草花などを描き、味わい深い言葉を添えるようになる。負傷から10年以上経過して出版された「愛、深き淵より」が最初の作品集と記憶しているが、それ以来多くの作品を世に出されている。私は同教科でもあるので人ごととは思えず、作品集や生き様に感銘を受け、道徳の資料等に活用するなどした。

いつしか、我が家の壁に彼のカレンダーを掛けるようになった。今年も正月の朝、所定の位置に掛け1月を開いてみると、緑鮮やかな葉と何とも優しげな色合いの寒椿に「与えられることと失うことは同じ重さらしい 散る花があつて咲く花がある」という言葉が添えてあった。その時この意味として、次のAとBの二種類が頭をよぎった。Aは、マイナス要因と思

われる出来事でも、前向きにとらえることで自分の人生にとってプラスに転化できること。Bは、長い人生における幾多のマイナスとプラスの振り幅を各々合計すると、ほぼ同等であり最後はつじつまが合うようになること。この二種類である。

新採用以来、実に充実した教職を経験させていただいたが、終盤、予期せぬ出来事が二つ発生し苦しんだ。一つは、東日本大震災である。5年を経過しようとしている今もって、多くの方々が帰還できず避難生活を強いられている。当時の学校は混乱の極みだった。特に相双地区は、文字通り壊滅の状況だった。相双教育事務所勤務であった私は、あまりにも無力だった。壊滅的打撃を受けた各校に対して、何の役にも立てなかった。このことが今も胸を締め付ける。私は、Aを常に心掛けようとしてきたが、これは死んでもプラスに転

化できそうにない。もう一つは、2年前に発生した職員の酒気帯び運転による免職という不祥事である。当初、ただただ茫然自失、激しく動転した。心身のバランスが崩れた。冷静に対応しなければと強く気を引き締めていないと、放心状態になりそうだった。続いて、生徒や保護者からの信頼を失ってしまったというやるせない心情、やるべきことはやっていたはずなのにいったい何が不足していたのだろうかという自己嫌悪、最低限教育活動は正常に運営せねばならぬというあせり、暗い表情の教職員をいかにして元気づけ前向きにさせ

るかという悩み等々…。次から次へとストレスが襲いかかってきた。そして、何よりも残念だったことは、生徒や保護者、同僚、地域から絶大な信頼を得ている有能な人材を失ったことである。このことをAに照らし合わせても、プラスに転化できるはずもない。これをお読みの皆さんには、不祥事根絶への取組を徹底していただき、私と同じ苦しみを味わわないでほしいと心から願う。

Bについては、なるほど、そうかもしれないと思う。上記二つの出来事のマイナス振り幅は、とてつもなく大きすぎる。ということは、反対側にプラスの振り幅が同等にあるということであろう。これは、納得できる。新採用以来、生徒達・保護者や同僚・教員仲間、地域の方々との出会いや日々の教育活動から、数多くのドラマや感動が生み出されてきた。このことに余りにも恵まれていたため、つじつまが合うように、終盤この2件が発生したのであろうか。いや、やはり私の未熟さ故であろう。一つ目は、もっと冷静かつ戦略的にうまく対応できていれば、もう少し望ましい形に近づけることができたのかもしれない。二つ目は、発生そのものを防げたはずだ。この二つをしっかりと背負って、これからも生きていく。

随想



福島県中学校長会副会長
小山 金也
(福島市立福島第三中学校)

散る花があつて、
咲く花がある